**待降節第3主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年12月15日**

**「キリストの証人」**

**ダニエル書12章1～3節**

**12:1 その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。その時まで、苦難が続く／国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう／お前の民、あの書に記された人々は。**

**12:2 多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り／ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。**

**12:3 目覚めた人々は大空の光のように輝き／多くの者の救いとなった人々は／とこしえに星と輝く。**

**使徒言行録22章22～29節**

**22:22 パウロの話をここまで聞いた人々は、声を張り上げて言った。「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしてはおけない。」**

**22:23 彼らがわめき立てて上着を投げつけ、砂埃を空中にまき散らすほどだったので、**

**22:24 千人隊長はパウロを兵営に入れるように命じ、人々がどうしてこれほどパウロに対してわめき立てるのかを知るため、鞭で打ちたたいて調べるようにと言った。**

**22:25 パウロを鞭で打つため、その両手を広げて縛ると、パウロはそばに立っていた百人隊長に言った。「ローマ帝国の市民権を持つ者を、裁判にかけずに鞭で打ってもよいのですか。」**

**22:26 これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところへ行って報告した。「どうなさいますか。あの男はローマ帝国の市民です。」**

**22:27 千人隊長はパウロのところへ来て言った。「あなたはローマ帝国の市民なのか。わたしに言いなさい。」パウロは、「そうです」と言った。**

**22:28 千人隊長が、「わたしは、多額の金を出してこの市民権を得たのだ」と言うと、パウロは、「わたしは生まれながらローマ帝国の市民です」と言った。**

**22:29 そこで、パウロを取り調べようとしていた者たちは、直ちに手を引き、千人隊長もパウロがローマ帝国の市民であること、そして、彼を縛ってしまったことを知って恐ろしくなった。**



**私たちが主日礼拝で共に読み進めています使徒言行録も22章まで進みました。先週は使徒パウロの弁明を共に聞きました。パウロが律法を軽んじて神殿を汚しているとユダヤ人たちから言いがかりをつけられて殺されそうになったために、パウロは千人隊長の許可を得て弁明をしました。その弁明は私たちがするようないわゆる弁明ではなく、真実を明らかにするという意味では弁明でありますが、パウロが語ったことは、ユダヤ人でありキリスト教を迫害していたパウロがイエス様と出会って回心へと導かれて、イエス・キリストの十字架と復活を宣べ伝える伝道者として、特に異邦人に福音を宣べ伝えるために召されたという「証し」でした。**

**そのパウロの証しを聞いていたユダヤ人たちは案の定といいますが、パウロの証しを遮って「こんな男は地上から除いてしまえ。生かしてはおけない。声を張り上げわめきたてて上着を投げつけ砂埃を空中に撒き散らすほどに今まで以上に激しく怒り、今度は千人隊長たちの目の前でパウロを殺害しようとしたのです。**

**なぜこれほどまでにユダヤ人が激しく怒るのか。その理由は選民意識だと考えられています。ユダヤ人はアブラハムを祖に持つ神の民イスラエルの民です。神様がイスラエルの民を愛して下さりモーセを通して律法を与えてくださいました。民の背きのためにバビロン捕囚という苦難を神様は与えられましたが、神様は約束の地に帰らせてくださいました。そしていつかイスラエルの民を苦難の中から救い出す救い主を与えてくださると約束して下さり、その約束を信じて救い主が来られることを待ち続けているのです。**

**ちょうど私たちは今救い主イエス様の御降誕を待ち望むアドベントの時を過ごしています。来週はイエス様の御降誕をお祝いするクリスマス礼拝です。ユダヤ人からすれば異邦人である私たちはイエス様を私たちの罪の贖いのために人としてお生まれくださった救い主と信じています。しかし、ユダヤ人はイエス様は救い主と信じていません。彼らはイエス様は自分を神の子救い主と自称して神を冒涜して世の中を混乱させた重大な犯罪者として十字架で処刑したのです。**

**そんなユダヤ人からすると重大な犯罪人であるイエス様を、こともあろうにユダヤ人であるパウロがイエス様と出会って迫害する者から神の子救い主と信じる者へ、さらに伝道する者となったこれだけでもユダヤ人は赦せないのです。パウロはユダヤ人の裏切り者です。そのパウロが弁明で語ることを最初は静かに聞いていたユダヤ人たちも段々と怒りの感情がわいてきたのです。そしてその怒りが頂点に達したのが21節の言葉です。**

**「すると、主は言われました。『行け。わたしがあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ。』」**

**「異邦人」ユダヤ人は選民意識からこの言葉を聞くだけで汚らわしい思いがするのに、パウロは神様が異邦人を救うために遣わしたというのです。あの汚らわしい異邦人を神様が救うなどありえない。救われるのは選ばれた民であるユダヤ人である私たちだけだ。もはや辛抱ならん、黙っておれん。と今度こそパウロを殺害しようとしたのです。**



**千人隊長はローマ人でいわゆる異邦人ですから、ユダヤ人の選民意識も宗教感覚も分かりません。ですのでなぜこんなにユダヤ人たちが激しく怒るのかさっぱりわからないのです。でも、当のユダヤ人たちは怒りに我を忘れていますので、その理由をユダヤ人たちに尋ねるのはもはや不可能です。それでパウロに聞くしかありません。部下たちに命じてパウロを鞭で打ちたたいて調べるように、パウロの両手を広げて縛ったのです。**

**その時です。パウロは側にいた百人隊長に言いました。**

**「ローマ帝国の市民権を持つ者を、裁判にかけずに鞭で打ってもよいのですか。」**

**この言葉をパウロから聞いた百人隊長は千人隊長に報告し、千人隊長がパウロの元に来て尋ねます。「あなたはローマ帝国の市民なのか。わたしに言いなさい。」パウロは、「そうです」と言った。千人隊長が、「わたしは、多額の金を出してこの市民権を得たのだ」と言うと、パウロは、「わたしは生まれながらローマ帝国の市民です」と言った。**

**「ローマ帝国の市民権」しかも「生まれながらのローマ帝国の市民権」あきらかにこの言葉の前に千人隊長たちは動揺し、パウロを縛ってしまったことを知って恐ろしくなったのです。**

**「ローマ帝国の市民権を持つ者」とはローマの法律の下にあるということです。ローマの法律では、正当な裁判をすることなくローマ市民を鞭で打つことは固く禁じられていました。もしこれを破ったとしたら、重罪を免れることができなかったほどです。ユダヤ人であるパウロがなぜローマ帝国の市民権を持っていたのか、はっきりしたことはわかりませんが、パウロのお父さんかおじいさんがローマ帝国に大きく貢献したために与えられたのではないかと考えられています。それゆえにパウロは生まれながらにしてローマ帝国の市民権を持っていたようです。そして、そのような家庭はかなり裕福な家庭であると言われています。また、生まれながらの市民権の方が千人隊長のように多額のお金を出して市民権を買った人間よりも身分が上と考えられていたのです。ですから、千人隊長にしてみれば、自分よりも身分が上であるローマ帝国の市民権を持つパウロを裁判にかけずに法律を破って鞭で打ってしまったとしたら、これはとんでもない重罪になってしまうのです。その寸前でパウロの言葉によって千人隊長たちは守られたということができるのです。**

**それにしても思いますのは、なぜパウロがここで水戸黄門の印籠のように「ローマ帝国の市民権」を主張したのかと思います。「ローマ帝国の市民権」を主張することで何か優遇されたい思いがあったのでしょうか。**

**パウロは周りの多くの人たちからエルサレムに行くことを止められました。多くの苦難が待ち受けているのが明らかだから、パウロの身の上を心配してエルサレム行きを阻止しようとしました。しかし、パウロはエルサレムに行くことが聖霊の導きであり、どんな苦難や困難さらには死が待ち受けていようともエルサレムに行くことを突き進みました。そして、実際にエルサレムにおいてパウロは殺されそうになり、縄で縛られるというように聖霊が示した通りになりました。もし、パウロの最終目標がエルサレムであるならば、エルサレムで福音を宣べ伝え、イエス様を証しすることが最終目標であるならば、死をも覚悟していたパウロですから、ここで「ローマ帝国の市民権」を主張することなく、鞭打たれて、非常に厳しい鞭打ちの拷問で死人が出るほどであったと言われていますので、パウロはそれもまた御心と受け止めていたのかもしれません。**

**しかし、パウロの旅はエルサレムで終わりではありません。19：21でこのように記されています。**

**「このようなことがあった後、パウロは、マケドニア州とアカイア州を通りエルサレムに行こうと決心し、「わたしはそこへ行った後、ローマも見なくてはならない」と言った。」**

**パウロの目的はエルサレムに行って終わりではありません。さらにその先のローマに行くことです。そしてローマに行くのはもちろんローマを見るのは見学ではなく、ローマでイエス・キリストの十字架と復活の福音を宣べ伝えて証しをすることです。そしてさらに言えば、『行け。わたしがあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ。』このイエス様からの使命を実行することです。「遠く異邦人のために」です。「遠く」です。はるかに遠い地であるローマの異邦人に、さらにその先の遠い遠い地の果ての地の異邦人たちにイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝えて証しをし、一人でも多くの人が救われるため。まだ見ぬ遠くの地に教会ができて共に天の御国を目指して信仰の旅路を歩むことです。**

**そのために、パウロは「ローマ帝国の市民権」を持つ者であることを主張することはあまり大事なことではないのですが、これを手段として用いることで道が開かれるならとの思いで主張したのではないかと思います。**

**そして実際にパウロはこの後不思議な導きでローマへと導かれて行くことになるのです。はるか遠く異邦人の地に福音を宣べ伝えるためにです。それは神様のお導きとしか言いようがない歩みであります。**

**もうすぐクリスマス。イエス様が私たちの罪を贖うためにこの地上人間の姿で幼子の姿でお生まれになって下さいました。私たちの罪の贖いのために十字架にかかって死んで下さり、私たちを罪から救い出して下さいました。イエス様は死で終わりではなく死から甦られて死に勝利をされて天に昇られました。いつの日にかイエス様は私たちの元に来て下さいます。私たちはアドベントのこの時、イエス様の御降誕と再臨を待ち望むのです。**

**私たちイエス様の十字架と復活を信じるキリスト者はこの地上の歩みで終わりなのではありません。私たちにはこの地上を生きるそれぞれの地に国籍があり戸籍がある、いわば市民権があると共に天の御国の市民権が与えられているのです。「わたしたちの本国は天にあります」（フィリピ3：20）の「本国」は今日の聖書箇所の「市民権」と同じです。われらの国籍天にあり。私たちは天の御国の市民権を持つ者なのです。この地上の旅路を終えて天の御国に入ることが約束されているのです。先ほど共に歌いました讃美歌482番の言葉で言うならば「あまつふるさと」です。天の故郷です。天の故郷、天の御国の市民権は千人隊長がローマ帝国の市民権を得たように、多額のお金を払って買うことはできません。それはただ一つ、イエス様の十字架と復活の愛を信じて受け入れるだけで与えられるのです。**

**パウロにとって本当に大切なのは「ローマ帝国の市民権」よりも「天の御国の市民権」です。それがどんなに大きな恵みであり、大きな希望であるのかがよくわかっていたからこそ、「遠く異邦人のために」「天の御国の市民権」を与えられる人が一人でも多く与えられるように、天の御国を目指して希望を持って歩む人が与えられるように、キリストの証人としてその人生を歩んだのです。**

**私たちも「天の御国の市民権」を持つ者として、その大きな恵みと大きな希望を大きな喜びを持ってキリストの証人として歩んでいきましょう。共に天の御国、天の故郷を目指して希望を持って歩む人が与えられるようイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝え、愛の業に励んでいきましょう。**